



TITLE:

支那の自然的環境

AUTHOR(S):

徳永, 清行

CITATION:

徳永, 清行. 支那の自然的環境. 經濟論叢 1940, 51(5): 203-212

ISSUE DATE:

1940-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/131459>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第 卷一十五第

月一十年五十和昭

紀元二千六百年記念論文集

支那の自然的環境

徳永清行

民族の本質は肉體的人類學の主要研究對象による外に、他の生理的、心理的な諸特性の考慮と相俟つて諸民族の『氣質及び素質』(Temperament und Dispositionen der Völker)が重要な複合體として認識されなければならぬとはウィットフォーゲルの強調する所である。¹⁾然もその主張は人類學的研究の達成せられざる場合に於ても民族の氣質及び素質はその經濟的發展過程において他民族との間に相異を與へることが證明されるといふにおいてである。

『固有な』(eigenlichen)支那の内部においても種々なる部分領域の住民の有する『肉體的な』(Somatischen)純解剖學的な種々相が存在し、²⁾而して言語に於ても固より差別が醸成されてゐるが、長年月の間に、氣質と素質とにおいて、總括して統一的な『支那的な型』(im ganzen ein heilicher „chinesischer“ Typus)が生成したのであり、それは社會的生活過程と同様に、階層に應じて微差づけられるとも、この型は比較的統一的な形態を持つことが認容されるのである。³⁾

リヒトホーフエンが若し人が事實に基いて穿鑿した原理を結論に取り入れるとせば、一領域の住民の性格は、その地理的環境 (Geographischen Milieu) の反映であるとしたるをウィットフォーゲルは謬見とし、更に高めらるべ

- 1) K. A. Wittfogel: Wirtschaft und Gesellschaft Chinas, 1931. SS. 9-11 (邦譯、平野義太郎、支那の經濟と社會、上卷 pp. 13-16)
- 2) ウィットフォーゲルは西部及び南西部の殖民領域を除外す。
Wittfogel: a. a. O. SS. 17-18.
- 3) F. von Richthofen: Chiner Bd. II u. III 及び Tagebücher der chinesischen

き立場を要求してゐるのである。それは地理的環境⁵⁾が直接に人間の性格、意識に影響を及ぼすのではなくして、逆に間接にその時の態度、方法なる媒介を通じて、それは人間がその物質的生活の配慮を如何に完遂するか、而して如何に自己を社會の部局編制たらしむるかといふ立場に求めんとするのである。⁶⁾かくの如き現象の觀察から推論が下されるに際しての誤謬の指摘は從來の推論の試みを充實せしめんとするものであり支那の個々の領域的特殊性の検討には更にこれより引出さるべき強力なる導きの線が見出されることを要請するからである。

されば支那を理解するの一方方法として先づ外的な自然的條件にこれを求むるに「あらかじめ、人間によつて見出されたる自然的諸條件」(von den Menschen vorgefundenen Naturbedingungen)の中よりその第一のものとして挙げられる地質學的條件によるとしても、それは自然により條件づけられた生産諸力(naturbedingten Produktivkräfte)の基調において提出されるものとする⁷⁾。

この立場は重視しなければならぬが、本稿では、支那に於ける人と環境の適應についてクレツシイのいふ地理學的結合要因(unifying geographic factors)の産物なる關聯に一考を置く。支那の生活過程の發展においてはその歴史は全土を支配せし政府としての存在が極めて微力であり、版圖に變化があり、その歴史は統治國家としての繼續ではなかつたが、文化の繼續は認められるを前提として、こゝからクレシイは政治的表稱(political genius)の産物ではなく地理學的結合要因の産物を傳へたるものを次の如く看としたのである。

Out of this passage of time has arisen a view of life which is deeply implanted in all classes of society. Close human contacts have made respect for personality inescapable. No abstract principle is worth more than friendship, so that, no

somatischen Typus 其他を参照とす。(Wittfogel: a. a. O. S. 17)

4) Wittfogel: a. a. O. S. 17 (邦譯、前掲 p. 24)

5) Wittfogel: a. a. O. S. 20, übrigens ein durchaus unkorrekter, weil statisch her, die Wandlungen in der Wirksamkeit einer natürlichen Grundlage verhüllender Ausdruck.

matter how true a thing may be, it should never be stated unkindly. Along with these social adjustments are those between man and his surroundings. This is well illustrated by an old proverb which reads, "Do your part, be satisfied with your lot, follow the seasons, and trust in Heaven." Perhaps the finest summary of Chinese philosophy is the desire to be "in tune with nature."

クレツシイの敘述たるこの古い古い國土には人により並にその人の活動により影響を蒙らざる地點は見出し難い程であり、人生が自然により影響されてゐると共に人は自然を變形し、更改しており、自然に對して人的捺印が押されてゐることを承認するであらう。支那景觀は恰も土と、土から生育した木の如くに結合された人との結合體である(Chinese landscape is a biophysical unity, knit together as intimately as a tree and the soil from which it grows)とのクレツシイの記述は支那の景觀を眼前に髣髴とせしめるものであるが、彼は更に支那人と土との關聯を次の如くに敷衍して地理學の任務としてゐる。

No mere photographic portrayal of China can reveal all the variedties which bind man and the soil together. Crisscross through the visible scene run innumerable threads of relationship. The landscape is a mosaic of many diverse elements, some dependent upon the vagaries of a none-too-certain rainfall, some conditioned by the limitations of the soil, still others molded by the force of tradition. All of these are linked together in to a synthetic, animated picture. It is the task of geography to describe and understand these relationships, to draw information from widely scattered sources, and to give it a new significance as applied to the understanding of specific areas. This living panorama forms the cultural landscape.⁸⁾

二

6) Wittfogel: a. a. O. SS. 16-21 (邦譯、前掲 pp. 26-29)

7) Wittfogel: a. a. O. SS. 23-24 (邦譯、前掲 pp. 32-33)

8) G. B. Cresssey, China's Geographic Foundations, 1933. P. 5, pp. 1-2

支那の地理的環境には土地の廣さと共に時間の長さの考慮が必要なことは言を俟たない所であり、現在の景觀の背後には極めて長きに亘れる歴史的條件が集積されてゐるものであり、支那國民生活の繼續はこゝを舞臺としたものであるが、支那全土の地層誌 (Stratigraphy, Stratum) についてはその地質學的生成の記錄に遡ることは差控え、クレツシイがその著に引用せるグラボウ (A. W. Grabau, *Stratigraphy of China*) の記述を一部摘録して見る。

「支那の凡ての岩層の下には——大平原の土砂 (sands) の下に、峡谷の黄土 (loess) の下に、現在支那の山嶽や、臺地や、盆地の大部分を組成するものである凝結したる礫岩 (conglomerates)、砂岩 (sandstones)、頁岩 (shales)、並に石灰岩 (limestones) 等の底に——凡てこれ等一群の比較的若い岩層の下底に、大陸の基礎を構成するものであり、支那の最古の岩層となつてゐる結晶層 (crystalline formations) の古代合成層が横つてゐる。その發生について見れば、その年代は年數や世紀數では計上し得ない悠遠な時の距りをもち、凡てに先行してゐるものであつて、この岩石合成層は吾人の注目に挑戦する底のものであり、地球の歴史に適用するとせば人間年代學が不適切にして用ふるをやめよと告げるが如きものである。……………この古代岩層は支那全地域の底に横つてゐるものであるけれども、比較的少數地方においてのみ地表に顯出してゐるにとどまる。⁹⁾」

支那全土の地理的基礎を一應右の如く概観して、地層の支那國土における顯れを捉へれば、地域的に相異を呈してゐるものがあり、この角度に於て地層上區別も行はれ得るものであり、従つてその反面に於て支那地域における地理的環境に對する支那人文景觀の密着適合の如何を把握することが出来るのである。峻嶮なる山嶽、廣大なる高原、低下せる沖積地は必然に人間をしてその自然的環境に順應せしむべく、そこに適合せる社會關係を生

9) Cressey, *ibid.* p. 34 (邦譯、日本外事協會、支那滿洲風土記 pp. 33-34)

み出して来る。かくして蒙古及び新疆の遊牧民、山西、陝西の黄土高地の高原居住民、揚子江並に西河流域の米、茶の農耕者をして、その地域の自然的特徴に適應せしむるやうに經濟生活上の異同を醸成することになつたといへるのである。¹⁰⁾

北部支那は(一)北支の大平原(二)山東の高地地帯(三)黄土高原地帯を、中部支那は(一)中部山嶽地帯(二)揚子江平野地帯(三)四川の赤色盆地を、南部支那は(一)揚子江流域南部の丘陵地帯(二)東南の沿海地帯(三)西江流域(四)廣西及廣東の丘陵(五)雲南、貴州の山地及び高原を包括するのであるが、支那本土と稱せられる地域は人口稠密であつて、それを可能ならしめし主たる特徴は河川の流域と平原の存在である。¹¹⁾

その最も著しき人口密集地域の一つは渭河流域であつて「支那文明の搖籃地」と稱せられるのであり、北支那に於ては黄河が稠密地帯であつて、その河名の發生せし如く黄土(Loess)の泥滓を流下して黄海に注入するのである。この黄土が支那經濟の進化に與へたる一大影響は既に周知のことに屬するが、風積層としての所謂風積文化の基礎をなしたものである。この黄土物質の流出は甘肅、陝西、山西の黄土高地に始まるが、その源泉は西北方から来る大風によつて送られたる粉塵が支那本部の山地に持來されて、極めて長日月の中に想像も及び得ない程な廣大なる地層を構築したものと傳えられ、この黄土の豐饒な腐蝕土壤が、風積層をなし、支那民族に無限の生産力を給するものと稱せられるのである。¹²⁾

中部支那における東南に向へる流域地帯は即ち揚子江によつて形成されるものであり、同江は西藏高地より起れる支那第一の長江であることはいふまでもないが、その重要度極めて高く、ガンヂス(Ganges)の印度に、ミシ

10) D. R. Bergsmark, *Economic Geography of Asia*, p. 460.
John B. Penniston, *The Origin of Loess*, *Journal of the North China Branch of Royal Asiatic Society*, 1933, p. 106.
G. Findlay, Andrew, *men and matters in the land of the Yellow Earth*, *Journal of the North China Branch of Royal Asiatic Society*, 1935, p. 56.

シツピーイ(Mississippi)の米國におけるとその役割を同じくする。同流域の人口は支那の他の何れの地理的區劃におけるよりも最稠密であつて、その基礎は四川の赤色盆地(Red Basin)により構成され、廣大なる揚子江流域には武漢諸都市即ち漢口、漢陽、武昌の如き都市が位置し、揚子江のデルタ(Delta)には上海が展開する。

揚子江流域の南は南揚子江丘陵地域であつて、更に南下せば、廣西、廣東の丘陵地となり、之れは西河の大部分を占むることとなるのであり、南部支那における西河の東流は、その河口に廣東を控え、西河の流域は南支那の基調となつてゐる。¹³⁾

これを地誌的に見れば、北支那の重要な高地は黄土層にて構成せられ、黃河流域の西部に位し、東部は山東の山脈をなし、黄土高地の南及び北支の平原は中部山脈地帯に横はり、前述の北支高地と赤色盆地地帯及び揚子江流域との境となり、そこには黃河の中流に繁榮した最古の支那文化の中心地を南方にかけて區劃がある。この地域の特徴は支那を北と南とに分つともいへるのであるが、それは地域的區劃をなすのみならず社會的經濟的區劃ともなり、又政治的に區劃となることがあり、支那國土の中に二つの支那とも云はれる二大地理單位をなすものである。

三

北部支那と南部支那の對照性は支那全土の共通性の検討と共に注目を要するものであり、クレツシイはこれを二つの支那の存在と謂ふ。支那の省別分類はその境界が自然に従つて區別されたものでなく、政治的及び軍事的變遷の結果であるから支那の地域的區分としては政治的のそれを離れて、自然の環境に従つて區劃を行ふ方が、よ

11) Bergswark, *ibid.* pp. 426-463.

12) 石川三四郎、支那風積文化と沖積文化(日本評論第十一卷第五號)

同、東洋文化史百講 pp. 136-140.

13) Bergswark, *ibid.* pp. 460-462.

り有意義な成果が得られるといはれる所以であり、かかる見地よりして北、中、南支那の三大別を三大河の流域に沿ふて區劃することも出来るがクレツシイはかくては中部支那と南部支那の本質的統一を認め得ないことになるとしており、事實北支那と南支那に二大別する方が顯著な對照的特徴を見出さしめるのである。それは北支那、南支那の中間地帯は南北兩特徴の移動地域であつて、兩地域の中間においては各種の特徴が重なり合ひ、又消え去るからである。ここに南北支那の特徴を綜合して作出せるクレツシイの比較は興味深き對照を一目の下に提供してくれるから左に列舉することにした。¹⁴⁾¹⁵⁾

北 支 那

- (一) 降雨量少く不定 (400—600mm.)
- (二) 洪水、旱魃の災害あり「支那の悲哀」
- (三) 寒暑の差激しく、降雪少し
- (四) 生育期四、五箇月、收穫一、二回
- (五) 半乾燥の氣候にして、蒙古方面よりの影響大
- (六) 降雨量正常ならざる場合は收穫少き不安定農業
- (七) 乾燥地帯
- (八) 瀝過されざる石灰質土壤
- (九) 飢饉頻發地域によりては殆んど毎年發生
- (一〇) 高粱、稷、小麥、豆類
- (一一) 草木に缺乏
- (一二) 黃褐色殊に冬季は黃砂の景觀
- (一三) 道路、而して兩輪車、駄獸輸送
- (一四) 驢馬、騾馬

支那の自然的環境

南 支 那

- 降雨多し (800—1,600mm.)
- 運河、灌溉、水運の便備はる
- 冬季嚴寒ならず、夏季暑熱高く、濕潤にして、氷雪は稀
- 生育期九箇月、收穫二、三回
- 亞熱帶の氣候にして、夏期時候風及び颱風あり
- 集約的耕作行はれ、不作少く、收穫多し
- 灌漑地帯
- 瀝過されたる非石灰質土壤
- 密集地以外は比較的に繁榮
- 主として米收穫
- 竹を産し、植物に豊富
- 四季を通じ綠色の景觀
- 駝石路、而して轎、苦力輸送
- 水牛

14) Bergsmark, ibid. pp. 460-463.
Cressey, ibid. pp. 13-17, pp. 34-43.
15) Cressey, ibid. p. 15 (邦譯、前掲 pp. 14-16)
馬場鐵太郎、支那經濟の地理的背景 pp. 157-158.

支那の自然的環境

二一〇

- (五) 保温裝置或は炕設備の十塀の家屋
- (六) 通路廣き聚落
- (七) 港灣に恵れざる單調なる海岸線、漁業重要ならず
- (八) 陸路による對外交渉
- (九) 滿洲への移住
- (一〇) 蒙古族を加へたるも本質的には單一民族
- (一一) 全地域に互に支那官話
- (一二) 古典的、保守的にして學者氣質
- (一三) 原始的、焦躁的にして商人乃至企業家氣質
- (一四) 多數の方言
- (一五) 原始的な非支那民族を加へたる多數の雜種民族

支那大陸は北方亞細亞大陸を横切りて陸路至りしものと南方海路によりしものの呼稱は相異し、北よりせるものは古代におゝてはセレス (Seres)、中古になつてはカセイ (Cathay) と呼び、南よりせるものにはシン (Sîn)、チン (Chin)、シネー (Sinae)、又はチナ (China) と稱せられたのであり、マルコ・ポーロ (Marco Polo) は北支那をカセイ (Cathay)、南支那をマンデー (Mandai) と稱したのであつたが、兩者の稱呼を異にせしは由來淺きものではなかつた。北支は亞細亞大陸に連接して多くの關係を生成したものであり、經濟的關係についても陸によつて生起した事情にかかり、その海外交易の發達は寧ろ近年に屬し、南支那に比し海外との接渉が少かつた。これに反し南支那は海外の動向により長く且大なる影響を蒙つたものであり、南支の海外接渉の度大なりしは、南部海岸諸都市の背後地が山脈地帶多きに原因し、南支の面接する海洋の誘惑が多く働かしにかゝることも説明される。

地理的環境によつて支那の史的變遷の跡を見れば、支那古代史の發展は北支において求められるものであり、北支は各種の國民的傳統を培養して數代に亘つており、南支の諸省は所謂支那民族ならざる未開民族によつて居住されたのであり、支那東方の低沖積層は南方來の文化が開花したと稱されるのである。西北方から來れる民族

16) 大日本文明協會、歐米人の極東研究 p.27.
Cressy, ibid. pp. 13-14.

は五穀には乏しかつたが主として高地、風積層地帯を占據したものであつた。東南から来て低地、沖積層地帯に開拓を行つた民族は粒食民族として米の文化を持ち西方來の粟の文化と對比され、¹⁷⁾家畜としての動物や、蔬菜としての植物は東南地帯は乏しかつたといはれるが、現代においては南支は北支より繁榮であり、又北支の保存的氣質に比べて進出的性格が目立つことは既に現實に見受けられる所である。

支那人及びその文化の起源は明確を缺くけれども、支那古代の民族精神ともいふべき角度において北西に起り支那を征服したとせられる「黃帝」と南東に渡來せりとも見られる「伏羲」「神農」については共に傳説に過ぎないであらうと考へられると共にそれは實在ではないとしても自然現象や民衆運動にその綜合的構成の基調を持つことは想像されるところの主張は首肯され得るのである。北西の風によりたる風積文化を基調としたる黃帝の文化と南東の水により沖積文化として基礎を下したる神農や伏羲の文化はその淵源を相異したものであり、文化史的に印度古代思想の支那東南文化即ち沖積層文化への潛流についての見解には興趣をそそられる所少からざるものがある。¹⁹⁾

四

支那を理解する方法として南北の對照性を知るとともに南北の共通性が問題となつて來るがここではその比較的統一的な所謂支那型の検討は措き、地理的環境に即してその輪廓を描くだけである。これを地誌的に求めて支那を一區劃とし地理的基礎による影響に即せば固より超然たることは出来なかつたのであり、上述の北中南部の夫々に擴れる平原と河川の流域を圍繞せる山脈地帯の存在により山地の包圍による支那の孤立は交通を困難にし地域の孤立を強化したものである。²⁰⁾歴史家によればこの自然的基礎は山地により或は沙漠による隔離となり、所謂支那國民をして自國を「中國」(Middle Kingdom)とし、世界の事物の中心觀を生ぜしめ、その漠然たる支那の

17) 粟は文字構成上から西方米を意味し、文字の發生順序からは米の文化が西方米の粟の文化に先んじたといはれてゐる。(前掲、支那風積文化と沖積文化 p. 325)

18) Cressey, *ibid.* p. 3.

19) 前掲、支那風積文化と沖積文化 pp. 322-329.

政治組織は世界の組織であるとなさしむるに至つたものであるとも見る。レーマーのいふ如くこの支那人の社會及び政治哲學の自己満足はたとひ地理のみによつては説明しがたき所ありとしても、支那の初期涉外關係に重要にして特徴ある事實となつて現れてゐることは否定し難い。²¹⁾

然も支那は次から次へ動いて行く。支那國土の地理的環境の敘述に於ては土地の廣大なることと併せて長年月に亙る進化過程の考慮を要するものであるは若干既述せし所であるが、クレツシイは語るに今日看取する所は、過ぎ來りし方を知りて始めて理解し得る長き映畫の一場合に過ぎないのであり、支那の地理的景觀は地域の廣大と同様に時間に於ても悠遠なものであつて現在に長い時代を經由したる所産であるとなすが、その引用せるミスニアンのビショップ (C. W. Bishop of the Smithsonian Institution) が「支那本來の土着住民が史上、顯著なる進展をなしたる場合は、例外なしに外部より受入れたる文化を通して果されたものである。今日各方面の遠隔地帯に生活せる集團は彼等自身の努力を以てしては進歩が出来ないことは著しく目立つ所である。亞細亞の南東の後期石器時代 (the Late Stone Age) の人々は原生支那人を含めて、硬直して屈伸を缺いてしまつて一定限界を越えては進歩し得ない文化的類型 (culture pattern) を顯出してしまつたと見るが眞相らしい。この類型はそれ自體その環境に密接に順應したものであつたが、然しそれはその過程において一つの慣習性に凝固して、外部からの刺戟の援助を得て辛じて脱し得る底のものに硬化してしまつたのである。かかる文化的現象は世界の歴史においては屢々生起したものである。それは現在、支那自體において未曾有の規模をもつて繰返されつゝあるのである。」²²⁾といへるは支那住民の進展とこれが遂行を可能ならしめたる外部よりの文化注入の一聯の見解として併せて味讀を要するものである。

20) Cressey, *ibid.* pp. 5-8.

21) C. F. Remer, *Foreign Investment in China*, pp. 12-14.

22) Cressey, *ibid.* pp. 3-4.